後撰和歌集注釈 ――巻二 春中（2）――

実川恵子

題①しらず　　よみ人②も〈朱〉

55　さくら花にほふ③ともなく春④くればなどか歎（き）のしげりのみ⑤する

【朱注】しらず

【校異】①題しらず―たいよみひとしらす（荒）　②よみ人も―よみ人しらす（中雲堀片）ナシ（荒）　③とも―ほと（久）　④春くれば―ちるとては（堀）　⑤のみ―しも（久）

【語釈】○**にほふともなく**―咲きもしないで。桜の「にほひ」は例自体が少なく（『古今』離別395・本集春中68 69・春下106・『拾遺』も三例のみ）、しかも、歌内容から見る限りでは、香・色艶のいずれともはっきりしないものが多い。ここも同様だが、次句との関係で見れば、「春立てど花もにほはぬ山里」（『古今』春上15）と同じく、具体的意味合としては「開花」の義と見てよかろう。『大系』は、この句を「咲き輝く間もないほどにあわただしく散り」と落花の義を含ませる。また、「ともなし」が用言を承ける場合は、上の語を曖昧化するのではなく、全面否定になるものと思われる（「こひしさはねぬになぐさむともなきにあやしくあはぬめをもみるかな」本集恋二672・「もろともにをるともなしに打ちとけて見えにけるかなあさがほの花」同恋三717・「惜しむともなきものゆゑにしかすがのわたりときけばただならぬかな」『拾遺』別316）。『新抄』が「春になれば桜の花が見事に色よく咲て、桜の花は春になりたるかひあることなれど、わが身はうき物思ひのありて、桜の花のやうに花やぐ心もなく」と比喩的に捉えるのはうがち過ぎであろう。　○**歎き**―「なげ木」に掛ける。『古今』1055 1056 1057、本集では他に一五例あるが、「木」に掛けないのは583のみで、その方がむしろ珍しい。

【訳】春が来ると、桜の花はいっこうに咲き初めもせず、どうして「歎き」という木ばかり生い繁るのかしら。

【評】第三句「春くれば」が上から続くのか下に係ってゆくのか判然としない。三句で切ると順接「ば」が落ち着かなくなるため、一応二句で切って訳したが、実質的には、「さくら花にほふともなく←春くれば→などか歎きのしげりのみする」と、上下両方向に働くものと見てよかろう。同じく桜と「なげ木」を対比させた、

わがやどの歎きははるもしらなくに何にか花をくらべても見む（春下93）

と同様に、春になっても鬱々と怡しまない恋の歎きを詠んだ歌である。『伊勢集』に「春物思ひけるに」の詞書で載り、『六帖』六にも伊勢の作として採られる。

ところで、詞書の「題しらず　よみ人も」の書式は底本の全体を律するものなので、それについて付言しておく。この書式について

は『袋草子』が、「或人ノ云、古今ニハ題不知読人不知、後撰ニハ題不知読人、拾遺ニハ題読人不知、如此書云々。然而末代本不二必分別一。是転々書写之失歟」（上、撰集故事）と、「或人」の説を是認するかのような口吻を洩らし、『八雲御抄』にも同様の記事がある（二、撰集）が、天福本奥書では「世間久云伝之説」としてこれを引きながらも、「亡夫命云、此説不レ定事也。被二書進一院之本皆如二古今一被書。今見二此本一果而如二古今一。如レ此事只後人之所レ称歟」と、定家は俊成の見解を承け、また行成本の書式に照らした上で、それを後人の憶説かと慎重な態度を示している。その結果、行成本本文を本行化した次の嘉禎本では通常の書式に復することになるが、天福本の時点では清輔の紹介する説に強く規制されていたわけである。従って、底本高松宮本では以下全て「題しらず　よみ人も」となっており、その内三四箇所まで行成本朱注が付されている。困みに、二荒山本・片仮名本・伝慈円筆本では「題読人不知」が比較的多い。

貞観①御時、ゆみのわざ②つかうまつりける③〈朱〉に④
河原左⑤大臣⑥　融　入古今

56　けふ桜しづくにわが身いざぬれむかごめにさそふ風のこぬまに

【朱注】む

【校異】①貞観―寛平（片）（但、「貞観トモ」ノ傍注アリ）　②ゆみの―ゆみはの（久堀片荒）　③つかうまつり―つかまつり（雲）　④に―ヒヨメル（片）　⑤院アリ（雲）　⑥左大臣―大イマウチ君（片）大臣（荒）

【語釈】○**貞観御時**―清和天皇の御代。本集12「寛平御時」、18「延喜御時」参照。　○**ゆみのわざ**―平安朝における弓の儀式としては、正月十七日に宮中で行われる「射礼（じゃらい）」と、同十八日に行われる「賭弓（のりゆみ）」が著名。この他にも、臨時に行われる「殿上賭弓」があり、その様子は、『蜻蛉日記』天禄元年（970）三月十日の記事や、『源氏物語』若菜の巻に描かれている。季節からいって、ここは「殿上賭弓」をさすものと思われる。　○**つかうまつりける**―賭弓を主催する意とも、参加・奉仕する意ともとれるが、【評】で述べるようにここでは後者。　○**けふ桜**―『新撰和歌』巻第一では「さくら花」とある。「けふ桜」には唐突な観もあるが、晴の場での一回的営為として歌われている臨場感が示されている。　○**しづく**―波の雫を花に見立てる歌はあるが（「かぢにあたる波の雫を春なればいかがさき散る花と見ざらめ」『古今』物名457）、花を雫に見立てる例は見当らず、しかも「いざぬれむ」といっているので、当歌では文字通り、桜花から落ちる露の雫のことをいっているのであろう。因みに、梅花から落ちる雫に鶯が濡れる歌として、「心から花のしづくにそぼちつつうくひすとのみ鳥の鳴くらむ」（『古今』物名422）がある。○**かごめにさそふ**―「――ごめ」は、「――」もろとも、の意で、本集に「ねごめ」（垣越しに散り来る花を見るよりはねごめに風の吹きもこさなむ」春下85）の例がある。「かごめ」は、香をこめること、香もろとも、の意。風が、香りもろともに、落花を促すことをいっている。

【訳】　清和天皇の御代、弓のわざを仰せつかったときに、

今日はこの桜の花の雫に、わが身は濡れてしまおう。香りもろともに落花を誘う風が吹いてこないうちに。

【評】橋本不美男は、史書における桜の季節の弓のわざの記録を検討し、当歌は、貞観六年（864）二月十五日か、同八年閏三月一日の、清和天皇の太政大臣良房の染殿への行幸の際のものであろうとしている（『王朝和歌史の研究』）。『三代実録』によると、両行幸では観

桜をし、天皇以下が弓を射、遊宴を催して、文人に詩を賦させており、当歌はこのような場で詠まれたものであることが想定できよう。（橋本は更に、八年の行幸の際、「落花無雪」の題で賦詩がなされていることに注目し、当歌もこの行幸において同題で詠まれた可能性を示しているが、当歌は詩題とは必ずしも適合せず、また句題和歌の成立時期とも考え合わせると、そこまで限定することはむずかしかろう）。

さて、『新抄』は、「花の下に弓を射ながら、雫をいざぬれん、さやうにぬれなば、風の吹て花は散たりとも、香は衣にとまるべければとなるべし」とあるが、桜の移り香を、それも雫を介して衣に残すというのは一般的ではない。「けふ桜」「いざぬれむ」という句に示されているように、上句は晴の場を意識して風流をきどった、ひとつのポーズと見てよかろう。当歌が、染殿行幸の際のものであるとすると、かつて文徳天皇の観桜の行幸もあり、桜の名所として著名であった染殿の由緒ある桜を賞で、かつその宴に加わって弓のわざを仰せつかった栄誉を歌ったものとして当歌をみていくことができる。

57　さくら花ぬしをわすれぬ物ならばふきこ⑥む風に事ずてはせよ
　　家よりとほき（を）所にまかる時、①前栽の③さくらの花にゆひつけ④
　　侍（り）ける⑤
　　菅原右大臣　延喜廿二年右大臣正二位　正暦四年五月贈左大臣　正一位十一月贈太政大臣

【校異】①まかる時―まかる時に（久雲堀）まかりけるに（荒）　②前栽の―ナシ（荒）　③さくらの花―さくら（中堀片）　④てアリ（久堀）　⑤侍り―ナシ（片）　⑥こむ―クル（片荒）

【語釈】○**ぬし**―主人。この桜の所有者である作者。　○**事づて**―伝言。桜に対して、花が咲いたときは風に伝え託して、たよりを送ってくれといっている。

【訳】　家から遠い所へ下る時、庭前の桜の花に結びつけました、桜花よ、お前が主人を忘れないものなら、吹いて来る風にことづてて、たよりをよこせよ。

【評】眼前の桜花に歌いかけながら、来春よりの風のたよりを期待している歌で、離京のつらさを嘱目の景を通して述べたものである。歌の趣旨は、広く人口に膾炙している、次の一首と通ずるものである。

　　流され侍りける時、家の梅の花を見侍りて　　贈太政大臣
　こち吹かばにほひおこせよ梅の花あるじなしとて春を忘るな
　　（『拾遺』雑春1006）

ところで、道真が地方に転出したのは、仁和二年（886）正月十六日に讃岐寺に任じられ下向した時と、昌泰四年（901）正月二十五日に、太宰権帥に左遷され下向した時との二回である。左遷時の模様は、『拾遺』歌を含みつつ『大鏡』に詳しいが、そこには道真の神格化の過程での脚色も想定され、必ずしも事実を伝えているとはいえまい。当歌が、讃岐下向の時の歌か、左遷の時の歌かを決める決定的な根拠は無く、また讃岐守在任中に一時帰京して春に任地に帰った時（仁和四年888）の歌かもしれない。しかし、詞書にも左遷を匂わせる要素がないことや、讃岐守となって下向したとき、道真は、来春は都の花を見ることができないという次の詩を残していることなどから考え、当歌は一応仁和二年の讃岐下向時の歌としてよいのではないかと思われる。

相国東閣餞席

為レ吏為レ儒報二国家一　百身独立一恩涯
欲レ辞二東閣一何為レ恨　不レ見二明春洛下花一
（『菅家文草』巻第三）

尚、『拾遺』歌は、梅と桜との相違はあるにせよ、発想を同じくしており、当歌がもとになって創作されたものであることも考えられよう。

58　春の心を　伊勢
あをやぎのいとよりは①②へて(を)おるはたをいづれの山④の鶯かきる⑤

【校異】①より―をり（荒）　②はへて―かけて（堀片）　③はたを―えたは（雲）はたは（荒）　④山の―ヤトノ（片）のへの（荒）　⑤か―の（堀荒）

【語釈】○**春の心を**―題詠による和歌の詠作が定着した時期以降では、歌の詞書の「……の心は」は、情趣といった意味でなく、題そのものをいうのが普通であるが、本集の詞書における「心」には、「寛平御時、花の色霞にこめて見せずといふ心をよみてたてまつれとおほせられければ」（春中73）のように古歌題を思わせるものや、「……あすか河の心をいひつかはして侍ければ」（恋六1014）、「ふしみといふ所にてその心をこれかれよみけるに」（雑三1243）などのように、土地のもっている特異な意義を「心」でいい表わしたもの、また「同じ心を」（168 249 1303）のように、前の歌との内容の類同を述べたものなど、様々な使われ方がなされている。当歌の詠作事情はわからないが、詞書の「春の心を」に見られる意識は、春の情趣・感慨というものよりは、「春」そのものをひとつの対象とし、主題化して詠んだ歌、というのに近かろう。ここでは一応、「春」ということを、と訳しておく。　○**よりはへて**―「縒る」は糸などを何本か合わせて一本にすること。「はふ」は伸ばし張ること。

【訳】　「春」ということを、
青柳の糸のような葉を、長く縒り合わせて織る布を、どこの山の鶯が着るのだろう。

【評】青柳が長く垂れて風になびいている様子を叙し、それを布を織っているところに見立て、鶯を擬人化しながら結びつけている。柳条はしばしば糸に見立てられ、鶯が縒り縫うものとして詠まれるが（「青柳をかたいとよりて鶯のぬふてふ笠は梅の花笠」『古今』神遊歌1081）、ここでは「いと」「よりはふ」「おる」「はた」「きる」が縁語関係にもなっている。典型的な春の状景を、技巧を凝らしながら観念的に構築した一首といえよう。

59　花のちるを見て　凡河内躬恒①
あひおもはでうつろふ色②を見るもの(物)③を花④にしられぬながめする(哉)かな

【校異】①凡河内躬恒―みつね（中久片荒）　②色を―色と（中久荒）物と（堀）　③ものを―花を（堀）　④花に―春に（堀）

【語釈】○**あひおもはで**―「あひおもふ」はお互いに思い合うこと。「あひおもはず」は所謂「片思い」で、自分を思ってくれない人を一方的に恋い慕うことをいう。男女関係で使われ、「相思はずあるらむ児ゆゑ玉の緒の長き春日を思ひ暮らさむ」（『万葉』巻十1936）など、『万葉』の相聞歌に頻出する語句である。当歌では、花を擬人化して「おもひ」の相手にしている。　○**うつろふ色**―「うつろふ」

は、盛りの時が過ぎ衰弱にむかうことで、花や葉が変色し、更に散ることをいう。また、人の心が他人へ移っていくこともいい、「花の木もいまは堀り植ゑじ春たてばうつろふ色に人ならひけり」（『古今』春下92）のように、花や葉の「うつろひ」が人事の「うつろひ」と重ね合されることも多い。　○**ものを**―詠嘆的に休止させながら、上下を接続させる助詞で、順接にも逆接にも用いられる。この場合は上句と下句との意味上の関係から順接。　○**ながめ**―ぼんやりと見ることだが、「花の色は移りにけりないたづらにわが身世にふるながめせし間に」（『古今』春下113）のように、単に見るというより、そこには時間的経過と憂愁の情がこめられることが多く、もの思いに沈んだ状態についてもいう。

【訳】　花が散るのを見て、

気を揉んでいる私には無頓着で散っていく花を見るにつけても、花には知られることのない思いに沈んで、ぼうっと見続けてしまうことだ。

【評】花のうつろいと、人の心のうつろいを重ね合わせることは和歌の常套的な手法だが、この歌で思いの対象となっているのはあくまでも花そのものであり、現実の場に即した人事への転換は見られない。花を賞で、落花を悲しむ心の有様を、「あひおもはで」「花に知られぬ」と花を擬人化し、それに対する偲ぶ恋の恋愛関係を仮構することで示そうとした一首で、花に寄せる作者の心の動きがよく捉えられている。

60　かへるかりをきき（こ）て　よみ人しらず

帰（る）雁雲ぢ（地）①にまどふ声すなり霞ふきとけこのめはる風

【校異】①まどふ―まよふ（中）まかふ（久）

※詞書・歌欠（荒）

【語釈】○**かへるかり**―秋に渡って来た雁が、春になって北方へ帰って行くことをいう。漢語の「帰雁」を和語化したもの。**【評】**参照。　○**雲ぢ**―雲路。鳥、月、星などが通るとされる、空や雲中の道。　○**まどふ**―『新抄』に、「雁の声のおくれさきだちて聞ゆるを、雲路に迷ふと思ひよせたるなり」とある。作者が、多数の雁の乱れ飛んでいる情景を思い描いていたかどうかは明らかでないが、雲の中から声だけが聞こえてくる雁を、行方を見失って行き迷っているものとして捉えて、「まどふ」という語で言い表した。　○**このめはる風**―「このめ」は「木の芽」。春になって木が芽ぶくことを「張る」ということから、同音の「春」を導く。「このめ」は「春風」にかかる枕詞としているわけだが、同時に、木の芽を張らせるその春風の意味が含みもたされている。『古今』の「霞たちこのめも春の雪降れば花なきさとも花ぞちりける」（春上9）の一二句は、序詞として「春」が導かれているが、当歌の「このめはる風」もこれと近似した機能をもつ。

【訳】　春になって北に帰る雁が鳴いているのを聞いて、

北へ帰る雁が、空で行き迷っている声がする。霞を吹き解いてくれ、春風よ。

【評】雁は、秋に渡って来、春に北方へ帰るわけだが、「帰雁」が景物素材として歌われていく過程には、中国詩文よりの影響が想定される。『万葉集』において雁は多く歌われているが、「帰雁」として意識されたものは、家持の「帰雁をみる二首」の「燕来る時になりぬと雁がねは国偲ひつつ雲隠り鳴く」（巻十九4144）・「春まけてかく帰るとも秋風にもみたむ山を越えざらめやも」（同4145）などわずかである。家持のように漢籍に通じていた作者を通して、「帰雁」が和歌の

素材として取り入れられ始めたといえる。平安朝になって、「帰雁」は詩の分野において盛んにうたわれる（「烟霞欲曙雞潮落　帰雁群鳴起廻汀」『凌雲集』「奉和江亭晩興呈左神栄清藤将軍」淳和天皇・「帰雁欲辞汀洲去　飢猿暁動羈旅情」『経国集』巻第一「春江賦」嵯峨天皇）。これら漢詩文の影響を受け、「帰雁」は「かへるかり」として歌語化され、春の詠物として「霞」などとの組み合わせで歌われるようになる。

春霞立つを見すててゆく雁は花なき里に住みやならへる
（『古今』春上31）

春霞立ちて雲路に鳴き帰る雁のたむけと花の散るかも
（『新撰万葉』上春）

また『躬恒集』には、当歌とほとんど等しい次の一首もある。

かへる雁雲ゐにわたるこゑすなり霞吹きとけ春の夜の風

朱雀院のさくらのおもしろきことと、延光朝臣のかたり侍り）ければ、見るよしもあらましものをなどむかしを思ひ）いでて

大将御息所　藤能子女御元更衣
三條右大臣仁善子弟
〈朱〉2

61　さきさかず我にな告げそ桜花人づてにやは聞かむと思ひ）し

【朱注】1やう　2三条右大臣女トアリ

【校異】①ことと―コト（片）　②延光朝臣の―延光朝臣（久）　ささみつの朝臣（堀）　③かたり侍りければ―かたりければ（雲片）　かたりはへりけるを（荒）　④見るよしも―みるやうにも（堀）　⑤あらましものを―あらさしを（久）　⑥など―ナシ（片）　⑦むかしを―ナシ（片）

【語釈】○**朱雀院**―代々の上皇の居院であるが、醍醐天皇も後院に使用した。38**【評】**参照。　○**見るよしもあらましものを**―見ることもあっただろうに。「よし」は方法・手がかり。「まし」は反実仮想であり、作者が、現在朱雀院の桜を自身で見ることの出来ない状況にあることがわかる。朱雀院は累代の居院であるから、作者大将御息所の仕えた天皇がそこにいれば、朱雀院の桜を見ることは出来るわけである。従って、現在は、すでに天皇が薨去した後と考えられ、この言葉には、天皇が生きておられれば、の意がこめられていると考えられる。心中心理が詞書中に入るのは珍しい。

【訳】　朱雀院の桜が見ごろですよと、延光朝臣が話しましたので、「（昔のままなら）見ることも出来ただろうに」などと昔を思い出して、

咲いたとかまだ咲かないとか私に知らせないで下さい。朱雀院の桜のことを、人づてに聞こうとは思ったでしょうか（思いもしませんでした）。

【評】朱雀院の桜を人づてに聞いた事により、それを見ることの出来た昔を懐古し、ひいては、亡き天皇への追懐の情をうたった歌である。

さて、作者「大将御息所」については、

(1)　朱雀帝女御慶子（『勅撰作者部類』）

(2)　醍醐帝女御和香子（定国女。『尊卑分脈』により「大将御息所」と号したことがわかる。）

(3)　醍醐帝女御能子（当歌勘物）

の三人について考えなければならない。まず詞書から、延光が朱雀院に出入りしていることがわかり、当歌の詠作時点で朱雀院にいたのは朱雀上皇と考えられる（延光は、朱雀天皇の近臣であった。5

【評】参照)。そこで「大将御息所」は朱雀上皇の妃ではなく、醍醐天皇妃であった人と推定できよう。従って、(1)は当たらない。

次に(2)であるが、和香子は延長二年(925)十二月十日入内(『貞信公記抄』。『一代要記』は「延喜三年」とするが、「延長」の誤りであろう。)、承平五年(935)十一月卒(『尊卑分脈』『一代要記』)。しかし、延光の昇殿は天慶五年(942)であり(『公卿補任』、延光は和香子卒の承平五年には九歳であるから、延光と贈答した当歌の「大将御息所」は和香子とは考えられない。)

最後に(3)の能子について検討する。能子は、延喜十三年(913)十月八日、更衣から女御になっており(『日本紀略』『一代要記』)、定方女で(『一代要記』)、後に左大臣実頼室となり、康保元年(964)四月十一日卒している(『日本紀略』)。しかし、能子が「大将御息所」と号したかどうかは確認できない。

ところで、68の詞書「衛門の御息所」については、日大本は、「能子同人云々父右衛門督之時為更衣」という独自の勘物を持つ。定方は、延喜十三年四月に左衛門督になっている(『公卿補任』)ので、「左」「右」の相違はあるものの、両勘物は矛盾しないことになる。このように、能子については、「大将御息所」であることを積極的に否定する根拠はない。

尚、能子は仁善子とよく混同されたらしい。仁善子についても康保元年四月某日条に、「前女御正五位下藤原朝臣仁善子卒、醍醐先帝女御左大臣室」とあるが、仁善子は、『本朝世紀』天慶八年(945)十二月十九日条に卒とあり、又続いて「仁善子者、故贈太政大臣第一女、先々坊御息所、王女御母也」とある。時平女、保明親王御息所であって、能子とは別人である。

62　題①しらず

春万くれば木がくれ多きゆふづく夜おぼつかなしも③花④朱2かげにして　よみ人②も〈朱〉1

【朱注】1しらす　2のかけにて

【校異】①題しらず―題読人不知(片)　②よみ人も―よみ人しらす(中雲堀荒)ナシ(片)　③おぼつかなしも―おほつかなしや(久堀片荒)　④花かげにして―花のかけにて(久堀)ヤマカケニシテ(片)

【語尺】○**木がくれ多きゆふづく夜**―「かくる」は、「かくれる」意だが、「吹く風と谷の水としなかりせばみ山がくれの花を見ましや」(『古今』春下118)・「やみがくれ岩間を分けて行くみづのこゑさへ花の香にぞしみぬる」(紀師匠曲水宴)のように、「～がくれ」として、「～によって遮られる」の意で用いられる。木によって遮られている状態・部分(「嘆きのみしげきみ山の郭公木がくれゐても音をのみぞ鳴く」『大和』六十五段)。従って、木によって見えない部分の多い夕方の月。　○**おぼつかなしも**―「おぼつかなし」は、心もとない・不安そうだの意(「をちこちのたづきも知らぬ山中におぼつかなくも呼子鳥かな」『古今』春上29)と、はっきりしない・ぼんやりしているの意(「秋霧のたちぬる時はくらぶ山おぼつかなくぞ見えわたりける」本集秋中271)があるが、ここは後者。薄暗い月光であることを言ったもの(「夕月夜おぼつかなきを玉くしげふたみの浦をあけてこそ見め」『古今』羇旅417)である。「も」は終助詞。　○**花かげにして**―「花かげ」は花の咲いている木の下陰。「にして」は「～に居て」と、場所を示す。

【訳】春には、繁った葉にかくされがちな夕方の月は、光が十分にとどかないことだ。花の咲いている木の下にいると。

【評】『万葉』巻十1875に、

春されば木の木暗の夕月夜おぼつかなしも山陰にして

一に云春されば木暗多み夕月夜

とある歌。花の下で、春の花を賞美しようとするのに、木がくれが多いために月光が薄暗く、十分に賞美できないのであろう。その物足りなさが、「おぼつかなし」と表現されている。

歌詞は明らかに『万葉』1875の左注に挙げる一本の系統を引くもので、「木がくれ多き」という熟さない語法も、伝承過程での「木暗」の訛伝もしくは誤訓によって生じたものであろう。

63　立（ち）渡る霞のみかは山高み見ゆる桜の色もひとつを①

【校異】①ひとつを―ひとへを（久）

【語釈】○**霞のみかは**―白く見えるのは、霞だけだろうか、いやそうではない。　○**桜の色もひとつを**―桜の花の色と、霞の色が同じに見えるよ。「ひとつ」は、不可分な状態（「月かげも花もひとつに見ゆる夜は大虚（おおぞら）をさへ祈らむとぞする」『古今』元永本春下103次）、もしくは、同一のもの（「緑なるひとつ草とぞ春は見し秋はいろいろの花にぞありける」『古今』秋上245）。「を」は間投助詞。

【訳】（白く見えているのは）一面にかかっている霞だけだろうか（いや、それだけではない）。山が高いので目に入る桜の色も霞と区別出来ないのであるよ。

【評】遠景の、山にかかる霞と、山に咲いている桜花との色の融合した状況をよんだもの。桜花と霞の取り合わせは普通、

山桜わが見にくれば春霞峰にも尾にも立ちかくしつつ

（『古今』春上51）

春霞なにかくすらむ桜花ちるまをだにも見るべきものを

（同春上79）

のように、桜を隠す霞を恨むのが常套的である。当歌は、霞と桜の不可分な状況に興を覚えたもので、その点が特色と言えよう。

尚、【語釈】にあげた『古今』（春下103次）の歌は、月光と桜花の色の融合をうたっており、当歌と趣向が類似している。

64　おほぞらにおほふばかりの袖①もがな春さく花を風にまかせじ

【校異】①袖もがな―袖もみな（久）　②さく―チル（片荒）

【語釈】○**おほぞらにおほふばかりの袖もがな**―大空に花をおおいかくすほどの袖があればなあ。「春さく花」、即ち春の花全てを守るために「おほぞらに」とよんだもの。壮大なフィクションである。『白氏文集』巻二十八「新製綾襖成、感而有詠」の、「争得大裘長万丈　与君都蓋落陽城」の句によるか（金子彦二郎『平安時代文学と白氏文集―句題和歌・千載佳句研究編』）。　○**風にまかせじ**―「まかす」は、そのものの思い通りにさせること（「別れをば山の桜にまかせてむとめむとめじは花のまにまに」『古今』離別393）。従って、風がちらすのにまかせるの意（「いまよりは風にまかせむ桜花散るこのもとに君とまりけり」本集春下105）。

【訳】大空いっぱいに花をおおいかくすほどの袖があればよいのになあ。そうすれば、春に咲く花を風の思い通りにさせはしないのに。

【評】本歌は、寛平御時后宮歌合に見え、『新撰万葉集』（下）にも所収されているが、それにも拘らず、「題しらず」中の一首とされて

いる。寛平御時后宮歌合から本集に入集している歌は一八首（64 112 165 206 263 273 307 318 353 355 407 449 465 477 485 487 493 943）であるが、うち歌合の歌として扱われているのは、わずかに二首（273「寛平御時后宮の歌合に　よみ人しらず」・353「寛平御時、きさいの宮の歌合に　在原棟梁」）のみである。そして、「題しらず　よみ人しらず」として扱われた歌が一二首と大部分を占めており、『古今』が、后宮歌合証本にある歌五四首も全て歌合の歌として明記するのと対照的である。このような『後撰』の現象を、杉谷寿郎は他資料による入集の結果とし、『後撰』の「晴の歌といってよい歌合歌に関心を示していないばかりか、むしろ背を向けている」姿勢ととらえている（『鑑賞』）。

一首は、春の花が散るのを惜しんだもの。その意味ではありふれたものではあるが、「おほぞらにほふばかりの袖」という誇調表現と、それによって風をさえぎるという発想は、一種独特のものである。

やよひのついたちごろに、女につかはしける

65　なげきさへ春をしるこそわびしけれもゆとは人に見えぬものから

【校異】①やよひ―二月（堀）　②ころに―ころ（中片荒）より（堀）③女に―女のもとに（雲堀）女ノカリ（片）

【語釈】○**なげきさへ**―「歎き」の「き」に「木」を掛ける。55【語釈】参照。「さへ」は添加の意。普通の木々だけでなく、「歎き」という木までも。　○**もゆ**―木が「萌ゆ」と、歎きの思いが「燃ゆ」を掛ける。（「ときわかぬ松のみどりも限りなきおもひにはなほ色やもゆらむ」恋四836）。　○**ものから**―順接か逆接かにより一首の趣向が異なってくる。順接とするならば、「もゆとは人に見えぬものから」→「なげきさへ春をしるこそわびしけれ」となり、下句が上句の原因を表すことになる。つまり、相手にわかってもらえないことがつらい意になる。一方逆接とするならば、「もゆとは人に見えぬものから→なげきさへ春をしる」→「こそわびしけれ」となり、わかってもらえないのに歎きという木が芽ぶくのがいやだの意となる。以上両意が考えられるが、順接とする場合は、歎きが春を知ることと、「人に見えぬ」こととの因果関係が認められない。そこで、逆接と解しておく。

【訳】　三月初旬に、女に送った、

歎きという木までもが、春を知るのはやりきれないことです。この木が芽ぶいているとはあなたには見えないのに（私の思いがもえているのを、あなたは御存知ないのに、歎きがまさってしまうのはやりきれません）。

【評】春に、木々が芽ぶくという自然の状況に託して、歎きの思いを女に訴えた歌。「なげき」「もゆ」は縁語で、それぞれが掛詞である。『能宣集』の、

なげきには春知らせじと思ひしを人のつらきにもえにけるかな

は、当歌と修辞・内容が類似している。

はるさめの降らば思ひのきえもせでいとどなげきのめをもやすらむといふ古歌の心ばへを女にいひつかはしたりければ

66　もえ渡る歎（き）は春のさがなればおほかたにこそあはれとも見れ

【校異】①きえもせで―きえなくて（荒）　②らむ―カナ（片）　③古歌―うた（久）　④心ばへを―心を（中久堀）　⑤女に―女ノカリ（片）　⑥いひつかはしたりければ―いひつかはしけれは（久堀）のたうひつかはせりけれは（荒）　⑦もえ渡る―もへまさる（堀久荒）　⑧とも見れ―ともみめ（堀荒）トハミメ（片）

【語釈】○**思ひ**―「思ひ」の「ひ」に「火」を掛ける。　○**なけきのめ**―「歎き」の「き」に「木」を掛け、「木の芽」と続けた。歎きという木の芽。　○**もやすらむ**―「もゆ」に「萌ゆ」「燃ゆ」を掛ける。「らむ」は原因推量の助動詞。また、以上の「ひ」「きえ」「なげき」「もやす」は縁語。　○**心ばへ**―趣意・趣向。「……といふ歌の心ばへなり」（『勢語』一段）・「今日のみわざを題にて、春の心ばへある歌奉らせたまふ」（同七十七段）等の用例がある。『古今』には用例がなく、本集もこの例のみ。　○**もえ渡る**―「もゆ」は「萌ゆ」と「燃ゆ」を掛ける。　○**春のさが**―「さが」は性質・通例。春の通例（「うぐひすのくもゐにわびてなくこゑを春のさがとぞ我はききつる」本集恋二615）。　○**おほかたにこそあはれとも見れ**―「おほかた」は、並・一通り。一通りの情趣でしかないとして、男の「なげき」をかわしている。

【訳】　「春雨が降れば、（消えるはずの）思いという火は消えもしないで、どうしてますます歎きという木の芽をめぶかせるのだろう」という古歌の趣意を女に言い送ったところ、

一面に芽ぶく歎きという木は、春の通例ですから、ひと通りには情趣あるものと見ますけれど。

【評】詞書中の「はるさめの」の歌は、『古今六帖』第一帖に、「はる雨のふるに思ひはきえなくていとど思ひのめをもやすらん」とある歌だが出典未詳。当時伝承され、人口に膾炙した歌であろう。意は、春になって増さる恋心を、木々が芽ぶくという自然現象に託して女に訴えたもの。おそらく男は、この歌をひきながら、消息文にしたのであろう。

これに対し、当歌は、男が「なげきのめをもやす」ことを、表面上春の通例の自然現象としてとらえ、そこに含まれた男の恋心を、「おほかた」のものだとしてかわしたものである。

女の許につかはしける　藤原師尹朝臣①　後一条左大臣左大将天歴二年叔中納言左兵衛督

67　あをやぎのいとつれなくもなり②ゆくがいかなるすぢ③に思（ひ）よらまし

【校異】①藤原師尹朝臣―左兵衛督師尹朝臣（中片）藤原師尹師（雲堀）師尹朝臣（久）もろまさのあそむ（荒）　②なりゆくか―ミユルカナ（片）　③すぢ―ふち（堀）

【語釈】○**あをやぎの**―枕詞。青柳の枝が「糸」を想わせるところから、同音の副詞「いと」に掛けた当代的用法である（「いづかたによるとかは見む青柳のいとさだめなき人のこころを」『拾遺』恋三815）。青柳と糸については58参照。　○**か**―本来自問の体で置かれる終助詞。ここは「も～か」の形で詠嘆を示す（「天雲のよそにも人のなり行くかさすがに目には見ゆるものから」『古今』恋五784）。独詠風に慨嘆する形での贈歌は常套的なもの。　○**すぢ**―曖昧に指示して「そのむきのこと・その関係の者」を意味する「筋」で、ここでは「思い寄る相手」となる。柳の細い枝が糸のようであるところから「あをやぎ」の縁に寄せたもの。「いかなるすぢに」で「あなた以外の誰に」の意を示す。　○**思ひよらまし**―「思ひよる」に

は、思ふ相手に実際に近寄る意味で用いられる例（「思ひ寄りて物はあるものを一日の間も忘れて思へや」『万葉』巻十一2402）もあるが、一般には、「心ひかれる・愛着する」の意。「いひさしてとどめらるなる池水の浪いづかたに思ひよるらむ」（本集恋六1016）や、「おきつなみうちいでむことぞつつましき思ひよるべきみぎはならねば」（『後拾遺』恋一608）のように恋の思いを「波」に寄せた表現も見られる。「くり返しくやしき物は君にともおもひよりけむしづのをだまき」（『千載』恋三829）、「あをやぎのいとみだれたるこの比はひとすぢにしもおもひよられじ」（『新古今』恋四1251）の例などは、当歌と同様「糸（苧）を縒る」意を掛けた縁語仕立ての歌で、やはり恋の贈答である。　○**まし**―疑念を示す連体詞「いかなる」を伴うことにより、迷いやためらいの気持を表わす（「何事も皆ふりにける君がためいかなることをいかにきかまし」『和泉式部集』）。

【訳】　女の許に詠んで遣りました、

あなたは大そう冷淡になっていくことですね、あなたでなければ一体誰に私は思いを寄せたらいいのでしょう。

【評】詠歌内容は明らかに恋の歌であるが、全体を「青柳」の縁語「いと」「すぢ」「よる」で仕立ててあるところから、この位置に配されたもの。「あをやぎの」を枕詞として一首を解したが、贈答相手の女をこれに寓しそのつれない現状を上句で慨嘆し、下句では、青柳である女に思いを寄せるのでなければ我が思いを何の糸筋（誰）に縒り寄せようかと自問したものとみることも可能であろう。但し、その場合、青柳がつれなくなるという上句の続きに不自然さが残る。

〈朱〉1①衛門のみやすん所の②家③、〈朱〉2うづまさに④侍（り）けるに、そこの花⑤⑥おもしろかなりとてをり（お）につかはしたりければきこえ⑦たりける⑧

68　山ざとにちりなましかば桜花にほふさかりもしられざらまし⑨

【朱注】1右　2のもと

【校異】①衛門―右衛門（中久堀片）左衛門（雲）右衛門督（荒）②の―ナシ（雲堀）　③家―ナシ（中荒）　④に侍りけるにそこの―のいへの（荒）ノカタハラニ侍ケルニソコノ（片）　⑤花―花を（雲）　⑥おもしろかなり―おもしろかりけり（荒）　⑦きこえたりける―きこえさせたりける（中）きこえさせける（久）　⑧御息所アリ（堀）　⑨しられざらまし―しらすそあらまし（堀荒）

【語釈】○**衛門のみやすん所**―未詳。日大本独自の勘物「能子同人」云々文右衛門督之時為更衣両所名不同随其時書歟」に依れば、61の「大将御息所」と同人と考えられる。『標注』にも「作者部類云大将御息所御門御息所同人也右衛門督時為更衣随其時云々」とするが、これは確認できない。61**【評】**参照。　○**うづまさ**―太秦。山城国葛野郡（京都市左京区）、二条通西方に当たる。広隆寺の所在地として知られる。　○**つかはしたりければ**―お遣りになる。主語は帝。御息所の立場から「きこゆ」の語を用いていること、及び次歌詞書に「御返し」とすることからして、そう判断される。作者表記を欠く為、古今集的作者表記の方法からすれば、前の歌の作者師尹の詠となるはずであるが、それでは待遇語が意味をなさないことになる。ここは帝が使いを御息所の許へ遣わしたのである。同様に「きこえたりける」は、御息所から帝への謙退表現である。この帝が誰を指すかについては問題が残る。即ち、次歌詞書に「御返し」とし、作者表記が無い事実からは、作者として当代の村上天皇を比定するのが穏当なのであるが、本集の場合、資料性が残存している事も考えられるので一概には決定できない。猶、これが村上天皇であると

すれば、衛門の御息所を醍醐帝女御能子と考えることは不可能となる。　○**山ざと**―太秦を「山里」と把捉する例は、本集秋上266にも見られる。『古今』に照しても「山里」は四季を通じて「春たてど花もにほはぬ」（15）所であり、「秋こそことにわびしけれ」（214）、「冬ぞさびしさまさりける」（315）といった心情を喚起する語であり、「見る人もなき」（同68）、「とふ人もあらじ」（『拾遺』51）と、距離的に隔絶されることによって生じる孤独感を内包する語である。

【訳】　衛門の御息所の家が太秦にありましたが、そこの花が満開だというので、（帝が）使いをお遣わしになりました時に、花に添えて（御息所が）申し上げました、

人目のない山里で散ってしまいましたならば、この桜の花は、美しさの盛りすらも知られないままでしたでしょうに。

【評】既に**【語釈】**欄で触れたように、人事の絡んだ一首である。しかし、「桜花」即ち詠者自身といった寓喩と見るには「にほふさかり」が穏当でない。あくまで桜を前面に立て、「美しい盛りに賞美して戴くことができ幸いです」と述べつつ、逆に、会う機会もなく山里で日を送る自身の心情を暗に込める体をなすもの。反実仮想の表現は、このような詠者の屈折した心情に重なる。

御返し①　②

69　匂（ひ）こき花のかもてぞしられけるうゑて見（へ）③るらむひとの心は

【朱注】合点アリ（71朱注参照）

【校異】①御返し―御返事（雲）返シ（片）　②たゝもとトアリ（久）　③見るらむ―みたらむ（堀）

【語釈】○**匂ひこき花のか**―贈歌68の「にほふ（さかり）」が桜の美しく咲き誇る意で用いられているのを受けた歌い出しであると考えられる。一体、「匂ひ」は、色彩についても香についても用いられ、又、「濃し」という表現もどちらにも使用可能な形容詞である。従って、この部分を「色鮮やかな花の香」とすることも可能であるが、前者の場合は、桜の花の色を「濃し」と捉えることにためらいが残り、後者の場合は「匂ひ」と「香」の意味の重複が不自然なものに映る。ここは美しく咲き映える花の全体的様態について言われたものと考えられる。例えば、『御堂関白集』の「匂ひうすき垣ほの影の撫子は心からにや色もまさらん」の一首は、「濃し」の対語である「うすし」を「匂ひ」と共に用いた例であるが、この場合の「匂ひ」も、垣ほの影に見映えもせずに咲く撫子の様態について言われたものであろう。以上のように解することにより当歌は贈歌とも正に相応することになる。　○**らむ**―推量の助動詞。ここでは婉曲。　○**人の心**―「匂ひこき花のかもて」知られる「人の心」とは、第一に「花を愛でる優美な心根」の意と解される。次いで人事的な要素に注目すれば、「あなたの私に対する心情」と読みとり得るが、その示す所は、軽い意味にとれば、花を受け取ったことに対する挨拶、ねぎらいの言葉となる。一方贈歌に込められた御息所の屈折した心情を正面から受けとめ、それに応えた語句であると解することも可能で、その場合は「私への深い心ざし」の意となろう（**【評】**参照）。

【訳】　帝の返歌、

戴いたみごとな花の様子で良く解りましたよ、このような花を植えて眺めておられるあなたの深いお心ざしは

【評】『新抄』に、「上の『山里に散なましかば』云々には、いささかうらみ奉らせ給ふ御意もあるを、そはしらせ給はぬさまに、かくこたへさせ給へるにもあるべし」とするが、贈歌の「知られざらま

し」を「知られける」と語句の上でも明瞭に対応させた所からは、68【評】に述べたような御息所の心情を察知し受けとめる姿勢が窺われる。それでも下句を【語釈】に挙げたような軽い意味に解して、単純に花を賞美する優雅な心根に気づいたとするのであれば、一種のはぐらかしとなり、『新抄』の解に近づくであろう。しかし、贈歌の表現を「山里の桜」に終始したもので人事性の絡まないものと見ることも可能なのに、返歌の下句で敢えて人事性の濃厚な「人の心」という語句を用い、桜を契機にそれを「知られける」と詠嘆を込めて表出する態度には、やはり人事への拘泥があると認められる。